

10月に京都で開催された国際会議の場で、米・カリフォルニア大サンディエゴ校のフォックス学長が、日本は何とすごい国かと感嘆しておられた。東北の被災地の人々のモラルの話かと思ったら、今夏の電力危機に関してだった。「電力危機の大ピンチを節電だけで乗り切った日本人は本当にすごい。サンディエゴは原発事故もないのに3日間も停電したのだから」と。確かに同時期、サンディエゴは大停電に見舞われていた。

今年の夏前、東京電力管内では計画停電や工場への供給停止など破局的な事態が憂慮され、その懸念はやがて全国に広がった。結果的に、それほど悲惨な事態には至らなかったが、工場の稼働率低下などによる経済損失、無駄な照明を消すなど無理のない節電の寄与などを総合的に分析する必要がある。とりわけ節電のプラス効果はしっかり検証すべきだ

プラチナ日本

三菱総研理事長 小宮山宏

暖房効果を上げるために



室内から戸外への熱の逃げ道は、主に3つある。1つは戸外から床下に入り、部屋で暖められ、屋根裏から外に抜ける空気の流れだ。雪国では、この流れによって屋根の雪が溶かされ、水が垂れ、ツララができる。エネルギーの観点で見れば、暖房はツララを作るために行われていると言ってもいい。

外へ熱が逃げてしまい、暖房を止めるとすぐに部屋が寒くなるからだ。魔法瓶の場合を考えてほしい。ヒーターで加熱しているわけではないのに湯はなかなか冷めない。つまり家の断熱性が魔法瓶のように高まれば、暖房を使い続ける必要はなくなる。断熱効果を2倍にすれば消費エネルギーは半分減らせるのだ。日本のエネルギー効率は全体としては高く、世界一といっても過言ではない。しかし家やビルの断熱は例外で、極めて劣悪である。またエアコンが普及していなかった昔に、蒸し暑い夏を過ごすための風通しの良い構造がそのまま残っているため無駄にエネルギーを垂れ流しているのだ。

暖房を我慢して風邪をひく人が増えたら元も子もあるまい。冬は日本で脳卒中が集中する時期でもある。無駄をなくすことやせ我慢を決して混同せず、可能なことから手を付けるべきである。

(こみやま ひろし)